

シンポジウム③

「漢方と中医学の架け橋——日本漢方の症例や治療法を中医学の目で解釈して、有効性や普遍性を抽出」

注目ポイント

日本中医学会は中医学を日本の医療に導入し活用することを使命としているが、日本で行われている漢方医学との接点を探り、融合の道を模索することも大切と考える。本シンポジウムは、今学術総会の総合テーマの副題「東アジア伝統医学の発展の可能性」を受けて、日本の漢方医学の症例や治療法、方剤運用法を中医学の目で解釈して、有効性や普遍性を抽出することを目的とする。

座長は常日頃日本漢方を世界の視野から考察されている安井廣迪氏。各演題は、まず漢方医学の黄金時代の江戸期の漢方の医案から学ぶことを平馬が抽出する。矢数芳英氏には、昭和の漢方の大家矢数道明師の臨床を中医学の視点で解析いただく。加島雅之氏には昭和から現代に至る漢方を評価し、その普遍的価値を剔出していただく。中医学と漢方の比較に長年取り組んでこられた戴昭宇氏には中医師から見た日本漢方を評価していただく。

日本漢方の遺産と現代の姿を中医学の視野から分析してその発展性を探り、中国医学をルーツとする東アジア伝統医学の共有財産となる可能性を議論したい。

(平馬直樹記)

シンポジウム③

現代漢方を評価する
—大塚敬節の口訣・症例を中医学的に紐解いてみる—

加島雅之

熊本赤十字病院内科

【はじめに】大塚敬節が現代漢方の普及・発展の立役者であったことは議論の余地がないであろう。

また、古方派としての臨床の行った後で、独自の臨床応用を作り上げた点で、現代中医学の理論とはおよそかけ離れた着想よりの方法論として、興味深い。この近代日本で独自に開発された漢方の方法論の代表である大塚敬節の臨床を中医学的視点により分析することで、現代漢方と中医学の交流の端緒としたい。

【方法】大塚敬節の代表的著作である「漢方診療三十年」（創元社 大阪）より大塚敬節の代表的症例及び処方運用の口訣を取り上げ、それを中医学的な視点により分析・解釈するとともに現代での臨床応用の基点を探る。

【結果】葛根湯、吳茱萸湯、柴胡桂枝乾姜湯、木防己湯、真武湯、小建中湯などが多用され、かつ中医学では認められない独特の使用法が多く認められる。

【まとめ】中医学ではほとんど使用されない処方応用が数多く認められ、日本の近代の漢方医学の独自性が確認できた。また、それらを中医学的に分析することで、中医理論の深化および臨床応用の拡大を図ることが出来ると考えられる。

略歴

◇現職

熊本赤十字病院 内科 医員

◇職歴

平成14年 国立宮崎医科大学医学部（現：国立宮崎大学医学部医学科）卒業
同年 熊本大学医学部総合診療部入局
平成16年 沖縄県立中部病院 総合内科国内留学
平成17年～ 熊本赤十字病院 内科勤務 現在に到る
平成18年 亀田総合病院 感染症科国内留学

◇学会活動

国際東洋医学会日本支部 評議員
日本東洋医学会熊本県部会 幹事
日本中医学会 評議員
東亞医学協会 会員
日本内科学会 認定医
日本感染症学会 会員